

今年ベルリン国立歌劇場が日本にいき、二ヶ月間全
国で公演します。この歌劇場はオペラはもちろん、バレ
エ団、ベルリン国立歌劇場管弦楽団と一緒に。それに
続いてトーマス教会少年合唱団とドレスデン室内管弦楽
団が公演します。我々は毎年大体五団体ほどを日本に派
遣し、また日本から三、四つの楽団を迎えています。問
題はもちろん、これにかかる費用をどうやってまかなう
かです。私は国が文化に対する資金的援助を単純に削っ
てしまうことがないとは思っていますが、少しでも誇り
を持っている国であれば、文化に関して補助を削ってし
まうようなことはないと思いますし、新しいDDRの政
府もそうでなければいいと願っています。例えば、シャ
ウシュピール・ハウスであっても、全てを自前でまかな
うことは無理でしょうし、また、国立歌劇場の公演の場
合も例外ではありません。ですから、これからは楽団が
採算をとって行くためにはあらゆる手段を講じる必要が
あります。入場料を大幅に引き上げても問題の解決には
難しいかも知れません。文化は、お金のかかるものです。

(九〇年四月十六日)

— シュミット教授、まずは学長ご就任おめでとうござ
います。これから色々とお忙しくなるでしょうが、
それとは別に、学長に選ばれたということは人々の
信頼の証しであり、非常に名誉あることだと思われ
ますが、

ええ、率直に申し上げて、芸術の分野の研究所で女性
として初めての、しかもDDRで初めての秘密選挙で選
ばれた学長に就任できたことを大変誇りに思っています。
学生が予備選挙を行った時に、ダンス音楽科の学生まで
含めた全員が一致して私が選んでくれたのです。ダンス
音楽関係の人達は私が彼等のために尽力するかどうか余
り信用していませんでした。でも、音楽大学は音楽的表
現に関するものでしたらすべて扱っているわけですから、
こうした疑惑は本当はまったく意味のないことなのです。
芸術協議会内部では圧倒的多数で私が選ばれたのです。
賛成二十五票、反対二票、棄権二票で、まったく信じら
れないような結果です。大きな課題が課せられたわけで
す。立候補したときに、向こう一年間は長期にわたる海
外での公演は取り止める、という条件を出しました。二
三週間ここを空けることを避けるためです。何かと問
題が起きやすいでしょうし、長期的に計画を立てなけれ
ばなりませんから。その後は一九九一年の四月に海外公
演を行うことになっているのですが、真っ先に日本に行

❖ ベルリン ハンス・アイスラー
音楽大学学長
アンネローゼ・シュミット教授



きます。でも、東ドイツや西ドイツ、オーストリア、ス
カンジナビアの国々など、飛行機でさっと行けるところ
の公演は続けていきたいと考えています。

— そんなにたくさん義務があたりだと、うらやましい
どころではないですね。

ええまあ、でも、とっても恐ろしいような気持ちなの
です。私自身、体験したことのないような恐ろしい気持
ち：自分からになりますか？私が信用され、それによって
起こってくる様々な関係……。とにかく私は、ここに関係
する皆様のご希望で、私に寄せられているものについて
はお応えしていこうと思っています。二つのベルリンが
一つになり、恐らくは首都になることでしよう。そうし
た意味で、今私達はちょっと困った状況にあります。芸
術的な教育機関の数を減らそう、という計画があるので
す。私にはまったく理解できないことなのですが、ベル
リンが首都になれば、人口は四五〇万人にのぼるとい
われていますし、それぐらいの規模の都市には普通、二、三
ないしは四つぐらいの音楽教育機関があります。例えば
ミュンヘンには音楽学校が二つありますし、西ベルリン
には二つありました。国際的に有名なシュテルンシェ・
コンゼルトホールがなくなってしまうのは非常に残
念ですが。その他東京、ロンドン、ニューヨークにも音

音楽学校はたくさんあります。こうして見たところ、まったく問題はないと思われるのですが、私達の仲間は不安を抱き、芸術や文化を担当している省庁は、この目下の爆発的ともいえる変化の中で、まず第一に文化に助成金を出そうとはしないのではないかと案じています。経済の立て直しが一番の問題だというのは当然でしょうし、この、道路、建築物、電話回線などの悲惨な状況の克服に責任を感じていることも理解できます。でも、この大学の持っている国際的な提携関係を軸にして存続を主張することができると信じていますし、これに私がかなり役に立てたことを嬉しく思っています。また、これから私達の雇主になるであろう人々にも訴えることができそうです。また、日本との結び付きも活用したいと思っています。日本―東欧協会の会長もいらっしゃいますし、私達の大学と武蔵野音楽大学との間で交換留学プログラムができることでしょう。私達の学生が三、六ヶ月ないしは十二ヶ月間日本に行き、その反対に日本の学生達が私達の大学に来るのです。講師が交換で講義をし、うちの学生が日本でコンサートをするようになるでしょう。私達の大学からはここ何年かの内に国際コンクールの入賞者がたくさん出ていますし、すでに日本に何人か行き、暖かく歓迎されています。また、非常に嬉しいことがもう一つあります。一九九一年の八月に、日本の児童向けプログラムを計画しているのです。宿泊などといった生活

面のお世話もします。恐らくJALや武蔵野音楽大学、ヤマハ等がスポンサーになって子供達を飛行機で連れてきて、私達がエクスカーションを企画したり、二、三週間の間にうちの教授にピアノやバイオリンのレッスンを受けることになっています。私はもう本当に心から楽しみにしています。

その他、今度の木曜日にヤマハと会って話をする事になっていきます。ヤマハの創立百周年の大阪での記念コンサートで演奏することになっているのです。ヤマハとはもうずっと親しくさせて頂いています。ヤマハという会社が目覚ましい企業展開をしているのをずっと見てきましたし、(例：オートサロン・ウンターデンリンデン)その一方でこの会社の文化事業が主にアジア地域にのみ限定されて行われているのも知っています。私はできればヨーロッパ地域で何か一緒に企画したいと思っていますし、この大学で、若い人のための音楽コンクールを共同で、双方に利益があるような形で行うことを計画しています。

― ひとりのDDRの音楽家として、今の一連の変化の後で音楽の分野にどんな変化が起きるとお考えですか？今まではどうで、そして今では何が違ってきましたか？

私はあの十一月の時点には、丁度日本にいたのです。至る所で人々があの歴史的な出来事に関心を持ち、至る所で私を祝福してくれて：信じられないような経験でした。

これまで、例えばうちの大学では政治経済的な意味からくる時間的なストレスがありました。音楽にとってはまったく無意味なことなのですが、その影響でひどく混乱した状況になっていました。私自身はマルキシズムに反対するわけでも何でもないですし、人が色々な哲学的な考えを持つことに対して何も言うつもりはありません。でもちよっとどうか、と思うのは、世界を理解するための唯一の方法として、哲学といえはマルキシズムのこと、と考えられていたことです。今やそういったものはずべてなくなり、学生達は精神的・時間的に非常に自由になり、手に入れた自由を満喫しています。うちの講師達は、引き出しの中にこっそりしまっておかなければならないようなものも持っていたのですが、今では学生達にタブーとされてきたアジア系の哲学が、ヨガの宗教的歴史から現代心理学に至るまでより取りみどりで学ぶことができ、皆飛び付くようにして学んでいます。そういった意味では、生活全体が以前よりずっと面白くなりました。

資本主義システムの中に生きている人から見れば非常に良いと思われるようなシステムも以前はありました。

私自身は良いものとは思わず、むしろ何か切り離された状態だと思っていました。この大学付属の音楽学校で、例えば十二歳から学んできた人には、この大学の席が自動的に確保されていたのです。そして国家試験にパスすると、就職口の心配はまったくありませんでした。職に就いたらもう、より大きな業績を上げようとか、自己実現に努めよう、という努力もせずに、年金生活に入るまで静かに働いていれば良かったのです。音楽についてより深い理解が要求される、ということを除いても、こういった状況では芸術ないしは文化が育ちにくいのは当たり前です。それでもうちのソリストやオーケストラのコンサートは日本をはじめ世界中で非常に人気が高いのです。このような環境の中でも、うちのメンバーがクリエイティブでいられたのは、ひとえに、外国での経験があり、視野をどんどん広めることの出来た指揮者達や、合唱団の指揮者達のお陰です。彼等は自分達の経験を元に、他の人達が最高の業績をあげられるように引っ張り上げてくれたのです。簡単なことではなかったと思いますが、西側の諸国では、素晴らしい業績をあげることができなかつた人々はすぐに追い出されてしまします。私自身、その様な人を少なからず見てきました。それが今度是我が身に降り懸かってくるのですから、うちの学生やDDRの音楽家達は皆とてつもなく不安に思っています。この国のことしか知らない人は、競争の原理を受け入れ、

音楽関係の仕事に携わるためのリスクに立ち向かうことができないのです。今までは、音楽関係の仕事に就いていれば安全だったのです。作曲家や画家達は国絡みの注文しか受けていませんでした。うちの大学もスポンサーになるべく、たくさんの方達に注文を出し、何千マルクというお金を使いました。うちの大学には楽器が揃っていないというのに、です。コンピューターもありません。明らかに計画ミスです。日本だったら恐らく『芸術家の楽園じゃないか!』と思われるでしょうね。基本的には確かにそうです。保障制度も万全で、お給料も良かったのですから。今まで恩恵を受けてきた人々は今の状況では敗北者というか、職を失うかも知れない危機にさらされています。うちの学生達の中にはきっと将来的にはきちんとした芸術関係の職業に就くことができるものもいるでしょう。国境が開かれて、競争が生まれたのです。壁開放後初めての学生総会では、学生達は皆びくびくして、こんな風に尋ねてきました。『私達はこの事態にどうやって対処したら良いのでしょうか?』私は『勉強することです。働くことです。ただ一つの可能性は、一生懸命学び、働くことです。』と答えました。日本ではもう当たり前のことだと思いますが。

あらゆる場面において、私達の現実には『音楽の国DDR』というスローガンから遠くかけ離れていました。住民何人ごとにいくつのオーケストラがある、などという

のはみんな統計上の数字にすぎなかったのですが、お陰でこの国はヨーロッパ随一の水準にありました。本当は、何年もの長きにわたって、現実とは掛け離れていたのです。今、若い人達は非常に不安定な状況にさらされています。私は、自分が色々な国でつちかっていた音楽上の経験や、若い人達のために役立てたいと思っていますし、導く側のものとして人生のまだ初めの段階にいる人達のお手伝いをしたいと思っています。

うちの大学には非常にたくさんの方が働いています。これも今となっては悩みの種になっています。何もしてこなかった人達には、気の毒ですが辞めてもらわなければなりません。この国では今まで考えられなかったことです。四十五歳以上の人はもう雇うことはできません。DDRに初めて失業者が現れるのです。しかも、工場労働者達よりも知的な職業に就いている人のほうが深刻だろうと思います。インテリ失業者達が路上にあふれるのです! 共産主義者達だけではありません。自然科学関係の学者にも、職を失ってしまった人がいます。研究所がなくなってしまうというだけのこと、その人達自身には何の責任もないことが多いようです。人文科学系の場合は多少違っていますが。例えば、壁が開放された時、こちら側から沢山の学生が西ベルリンにだれ込み、向こう側を見てきました。でも一時的な熱狂はすぐに醒めてしまい、冷静な目で見られるようになりました。する

と、(繁栄の)舞台裏まで見てしまった人達はこちらに戻ってきたのです。始めは『DDRの小市民』という意識を持たざるをえなかった学生達も、どこか他のところで何か特別のことができるわけではない、ということに気が付きました。価値はいかに自分を売り込むかによって決定され、必ずしも業績が第一ではないことが分かったようです。いわゆるハッタリを利かせることに私達は慣れていますし、余り気持ちの良いものではありませんが、これから身に付けていかなければならないでしょう。芸術関係の人達は今まで、比較的細かいことにこだわる人が多かったのですが、国境が開かれた今、考え直す必要があるでしょう。巷の人々がいついかなことも理解できるのですが、事の進行があまりに早すぎて、チャンス逃してしまっただけの気がします。そんなに先に

進まずに、色々改善策を図っていくこともできたと思います。でも、今のところ皆舞い上がってしまったています。うちの大学は今まで、変な風に保守的で、まるで修道院のようでした。誰も入ることは許されず、誰も出ていくことは許されませんでした。外国人の学生もいません。西側では外国の学生はただで大学に来ることがありますが、うちの場合は七千ドル必要ですし、その他にも義務があります。大学の催し物といえば私のものだけ。まったく理解に苦しみます。音楽大学はこの街の文化のために何もしてきませんでした。今は定期的にコンサート

トをしていますし、西ベルリンのオーケストラと一緒にすることもあります。本当はこれが当たり前だと思います。十一月まで閉じ込められていた精神の檻の中から開放されて、軽やかな気持ちです。これから、人事の面でこなしなければならぬ仕事がたくさんあります。間違っで行われた人事を正さなくてはならないのです。教会とつながりがある、というだけで十年も十五年も大学から遠ざけられていた講師や教授達がいます。党幹部の情報公開のお陰で、どうして彼等が何年もの間拒否され続けてきたのが分かったのです。つまり、イデオロギー的・政治的な理由から、彼等は少ししかお給料が貰えず、昇進できなかったのです。頭の痛い問題です。

ー 日本と一緒に仕事をする可能性もなくなってしまうわけではないと思いますが。例えば、北九州のほうから大きな関心が寄せられていますし…

もちろん。私達ベルリンにある三つの芸術大学は、つまり音楽大学、演劇大学、造形大学の三校ですが、お互いに密接な関係を持っていますし、西ベルリンの芸術大学とは違う独自性を保ち続けたいと思います。ヴァージニア州のリッチモンドと一緒にフェスティバルをすることになっていて、昨日も演劇大学の先生と話をしていた

たのですが、彼は日本で何か一緒にできたら、と話して
いましたよ。例えば音楽大学と共同で音楽や映画、パン
トマイム等と一緒にいるのです。こういったものの場合、
言葉は必要ありません。日本で何かオーガナイズできた
ら本当に素晴らしいと思います。

(一九〇四年四月二十五日)

♣ アルフレット・ゲルラッハ、62歳

シュプレーバルトの渡し守
リュッペンナウ在住

― 選挙の結果をどう評価されますか？そして統一ドイ
ツについてどんな不安と期待がありますか？

私は、今日のポーランド領土で生まれたんです。妻は、
純粹なシュプレーバルト人。戦後、私は故郷に戻るこ
とはできなかったけれど、ここにどまったことを少しも
後悔はしていませんよ。

国民の大部分は、選挙の結果に失望していると思う。
SPD (社会民主党) が指導的立場をとるって、多くの

住民たちは飲料水として飲んでいたんだ。私自身も六十
年代初めまでまだ飲んでいたが、今じゃ、すっかり汚れ
ちまった。シュプレーバルトは昔、魚がいっぱいいるん
で有名だね。もうそれも姿を消したってわけだ。例えば
マレーネ (鱒の一種) これはリュッペンナウの街の紋章に
なった魚だけれど、もうここでは死に絶えちゃったよ。
これは、悲しい成果だね。



人々は信じていたからね。でもこうなったのも、不思議
ではないな。結局この国で初めての自由選挙で、多くの
ことは新しく、予測不可能だったんだから。もつとも新
首相のデメジエールが決して悪くないという認識は、段々
熟してきているよ。この人は、国をそう簡単に売りに出
してしまふことはない。とにかく、彼の政府表明を聞い
て、そんな印象をもったね。私自身はSPDを選んだだけ
れど、でもデメジエールはいいと思う。きつと特に田舎
でCDU (キリスト教民主同盟) が支持されたんだらう
ね。田舎では、教会が大きな影響力をもっているし、二
十三条によってすぐ統合され生活水準の速やかな改善と
市場経済のよりよい可能性を期待したんだらうよ。

私は通貨統合に不安があるね。年金が一对二になった
ら……考えられないな。もつとも我々は新しい生活水準
をまず働いて勝ち取るべきであって、贈り物等待ってはい
けないというのが、私の立場ですがね。あなたも知っ
ているだろうが、DDRの工場で一番重要だった機械は、
コーヒー沸かし器だった。仕事が六時に始まると、もう
八時ごろには立派にできたからね。今後は、こうはい
くまい。でも過去の勘定を庶民が払わなきゃならないと
したら、こりゃひどいよ。

我々は何とありとあらゆるひどいことをしてきたこと
か！環境をどんなにぶち壊してきたか見てごらん！シュ
プレーバルトの河の水だって、昔はきれいだったから、

♣ アンドレア・ヴァイス、二十二歳
大学付属病院 (シャリテ) 看護婦

ベルリン在住

― 昨年十月の出来事以前と比較して、DDRの現在の
状況をどう評価しますか？

DDRは、没落しつつある国です。一九八九年十月十
一月には幻影を打ち破り、ついに私は、いえ私たちは大
人になったと思っていたのに、今また未成年に後戻りし
ちゃった感じですね。上の方で起こっていることは、再
び私なんかが何の影響も及ぼせないことですもの。例
えば、明らかに右寄りのDSU (ドイツ社会同盟) の党
員が何故大臣のポストをもてるのか、とても理解できま
せん。でもこれは、最初の民主主義的な選挙の短所とも
いふべきものでしょうね。少数派は多数派を補うという
こと。多数派はお金と裕福さを選んだと同時に、この国
の自主独立の放棄をも選びました。

仕事の上でも一九八九年十月の出来事以来、若干変わ
っていきだろうと思っていました。私は、出世主義の一
つの牙城と思われる大学付属病院 (シャリテ) で働い
ています。階級制と古いしきたりに支配されている私の